

# 対話通訳における通訳者の自発的発言「詳細質問」の考察

## —助産師外来における通訳を介した会話場面の会話分析—

飯田奈美子(日本学術振興会)

### 1. はじめに

対人援助場面における対話通訳実践において、通訳者は両者の発言を正確に訳出する「通訳行為」だけでなく、通訳者自身が発言を行う「自発的発言」も行っている。通訳者の自発的発言についての研究では、「聞き返し、理解の確認(飯田 2019)」「トラブルの発生・処理の報告(飯田 2018)」「訂正(飯田 2019)<sup>1</sup>」が報告されている。「聞き返し、理解の確認」とは、通訳者が発言者に対して、正確な通訳を行うために発言内容について確認したり、聞き取りに問題があった場合に聞き返したりすることである。「トラブル発生・処理の報告」は、訳出中に質問が入り訳出がすぐに完了できなかった場合にどの時点で訳出が完了されたかについて発言者に対して報告するものである。これにより通訳者は訳出の位置がずれるというトラブルがあったことを報告し、その処理(訳出が完了した)がなされたことも併せて報告することである。「訂正」は、通訳者の訳出が不適切などの理由により、聞き手が原発言の意図を理解できず、求められる返答と異なる発話をした場合に、その発言を訳出せず、通訳者が原発言の意味を説明し、求められる返答を引き出すことである。

本研究では、助産師外来における通訳を介した会話場面において、妊婦・家族の発話後の訳出の位置での通訳者の自発的発言、特に妊婦・家族に対して行う質問を抽出して分析を行いどのような作用があるかを明らかにする。このような発話連鎖を対象とした研究は行われておらず、通訳者の自発的発言の詳細を明らかにしていくために、この発話連鎖を事例分析する。なお、研究方法は、外国人集住地域にある有床診療所(産婦人科)の助産師外来において、助産師と外国人妊婦・家族(ポルトガル語話者)の会話を病院に勤務している日本語—ポルトガル語通訳者<sup>2</sup>が通訳をしている場面(7場面)を録画・録音し、そのデータのテープ起こしを行い、会話分析の方法に則ったトランスクリプトを作成し分析を行った。

### 2. 助産師外来の通訳を介したやりとりにおける通訳者の質問

助産師外来における通訳を介したやりとりの基本的な連鎖構造としては、助産師が質問をし、それを通訳者が訳出を行い、次に妊婦・家族が回答を行い、通訳者がその訳出を行うというものである。今回分析したデータは、妊婦・家族の回答を通訳者が訳出を行う位置において、通訳者が訳出を行わず妊婦・家族に質問を行うものである。これには通訳者が聞き取りや理解の確認を行う「確認」と、通訳者が妊婦・家族の発話内容に関連した情報をさらに引き出すなどの「詳細質問」があることが分かった。「確認」は修復連鎖であり、妊婦・家族の発話内容の聞き取りや理解の確認、理解候補の提示で、これは上記の自発的発言の先行研究における「聞き返し、理解の確認」にあたる。

一方、「詳細質問」には「訳出のための質問」、「SPPを補完する質問」があることが観察された。これらは、妊婦・家族の発話の聞き取り・内容を理解しているが、その発話内容では、適切な訳出ができないためや、期待された形式の応答ではない、助産師の専門的活動に必要とされる情報としては不足しているために行われる質問である。「訳出のための質問」は、言語構造の違いからくるシフトを解消するために確認するもの(例:姉妹という単語がでたら、姉か妹かを確認する)である。以下では、「SPPを補完する質問」について述べる。

<sup>1</sup> 飯田(2019)では、この行為を「修復」と呼んでいたが、会話分析概念の「修復」とは異なる行為であり、それとの区別をするために「訂正」と変更を行う。

<sup>2</sup> 調査対象の通訳者は当該病院に25年通訳者として勤務しており、出身国では理学療法士の資格を取得し勤務経験がある。また、日本で自治体開催の医療通訳研修を受講している。

### 3. 分析

「SPPを補完する質問」とは、FPPが開始した活動の途上で、助産師が必要としている情報を含んだ、もしくは期待された形式のSPPにするために補完する作業を行うものである。これには、「期待される形式の応答を引き出すための質問」と期待される形でSPPが産出されたが、「情報を補うために行われる質問」の2種類が観察された。

#### 3.1. 期待される形式の応答を引き出すための質問

この場面は妊婦検診にて体重が少し増加している妊婦に対して、助産師が体重増加すると出産が大変になるため体重増加を注意しないといけないと告げた後、1行目の発話を行う。助産師は「1日は3食普通に食べる？」と指折り数えながら質問している。この質問は「普通に」がどこにかかっているかによって、2つの意味が含まれると解釈できる。①1日の中で朝、昼、晩と3食を定期的に食べているか、②量や内容などどのような食生活かを聞く質問になっている。通訳者は1度に2つの意味内容を質問する形式をとるのではなく、連鎖を分けることによって、助産師がこの質問を行うことによって成立させようとしている行為を達成させるように自らの発話をデザインしていることが観察された。

- 【抜粋】 S=助産師、P=妊婦、O=妊婦の母親 IJ=通訳者の日本語発話 IP=通訳者のポルトガル語発話
- 1S 1日は3食普通に食べる？ ((上体を起こしながら、指を折る))
- 2IP =Três refeições então pega[ por dia?  
Três(3) refeições(食事) então(それで), pega(取る) por dia(1日あたり)  
日本語訳: それで、1日3食とりますか?
- 3P [Não  
日本語訳: いいえ
- 4IP Não?  
日本語訳: いいえ?
- 5S =No?
- 6P Huhum ((首を横に振る))
- 7 (0.4)
- 8IP→ Quantas vezes?  
日本語訳: 何回?  
9 (0.4)
- 10O Tem dia que ela não come o almoço, assim, sabe?. Só só com o café da manhã
- 11O [e prefere não [almoçar. [ficar sem fome.  
Tem(ある) dia(日) que ela(彼女は) não(ない) come(食べる) o almoço(昼食), assim(そんなふうに) sabe(わかる). Só com o café da manhã (朝食)e prefere(好む)não(ない) almoçar(昼食をとる). ficar sem fome(空腹ではない).  
日本語訳: 昼食を食べない日もある、わかる? 朝食だけでお昼は食べないことを好む、空腹ではないから
- 12IJ [朝 [食べて、
- 13S [うん
- 14IJ お昼ぐらいは食欲がないから[昼抜きで、
- 15S [あ:
- 16S う:ん
- 【17-21 行中略】
- 22S 内容はどう?
- 23IP E o que é que come bem?  
E(そして)o que(何) é que(それは) come(食べる) bem(よく)  
日本語訳: 何をよく食べる?
- 24 (1.0)
- 25O [huhuhuhu Na janta?  
日本語訳: 夕食で?
- 26 (0.3)
- 27IP É, ao café da manhã, o que [é que ser.  
É(ええ), ao café da manhã(朝食については), o que é que ser(何ですか)  
日本語訳: そう、朝食ではどんなものを
- 28O [É fome, ela toma leite, [come um pão.[bolachina  
É fome(お腹すいた) ela(彼女は) toma leite(牛乳を飲む), come(食べる) um pão(パン) bolacha(ビスケット)  
日本語訳: お腹がすいたら、彼女は牛乳を飲んでパン、ビスケットを食べる
- 29IJ [朝ごはんは [牛乳と
- 30S うん
- 31IP→ e::Pão de forma?  
日本語訳: 形のあるパン? (食パン?)
- 32O É
- 日本語訳: そう
- 33IJ 食パン[に、
- 24S [あ:うん
- 35IP→ で: (0.3)Bolachinha assim? Bolachinha água-e-sal ou bolacha?  
Bolachinha(ビスケット) assim(このような) Bolachinha água-e-sal(クラッカー) ou bolacha(クッキー)  
日本語訳: ビスケットのようなもの? クラッカーとかクッキーとか?
- 36O Não, de chocolate.  
日本語訳: いいえ、チョコレートの
- 37P Huhuhuhu
- 38IJ チョコクッキー

まず、通訳者は1行目の助産師の質問を「Três refeições então pega por dia? (それで、1日3食取りますか?)」と訳出している。ここでは「普通に」に対応する訳語は含まず、助産師の質問内容の①に対応する訳出になっている。また、助産師の原発話にあわせてYes/Noで返答ができる極性質問の形式がとられ、3行目で妊婦は「Não (いいえ)」と非優先的の応答を行っている。極性質問などの典型的な隣接対において、FPPが産出されるとそれに適合するSPPの産出が要請されるため、SPPの産出においてYes/Noでの応答がかえってくるのが適格的となる。そして、「Yes」であれば優先的であり「No」であれば非優先的となる。この場合、妊婦は「Não (いいえ)」と非優先的の応答を行っている。しかし、非優先的の応答は優先的の応答と比べて遅れて、複雑に、間接的に産出されるという特徴がある(串田他 2017)ののだが、妊婦は「Não (いいえ)」と述べただけで、遅延や非優先的の応答の理由の言及などはなされていない。非優先的の応答において典型的とされる特徴がない応答がなされたことによって、通訳者は4行目で確認を行い、非優先的の応答として期待される形式に修復されることを求める。しかし、妊婦は6行目において首を横に振り、非優先的の応答として期待される形式に修復することはしなかった。そこで、8行目において通訳者が妊婦に期待される形式の応答を引き出す質問を行ったのである(詳細質問)。この場合において非優先的の応答として期待される形式としては、1日の中で朝・昼・晩と3食を食べていることを否定するのであれば、3食のうちのどれを食べているかを説明することが期待される。8行目で通訳者が「Quantas vezes? (何回?)」と質問したことで、非優先的の応答の仕方が不適切であると認識した妊婦の母親が10、11行目で非優先的の応答として期待される形式に適合する応答を行ったのである。

では、なぜ通訳者が1行目の助産師の質問の訳出において、助産師の質問内容を理解しているのであれば、最初から8行目のように「1日何回食事をとっているのか」という形式にしなかったのかという点が問いとして浮かび上がる。これには、医療場面の質問における「最適化の原則」(Boyd&Heritage 2006=2015)が適用された訳出行為がなされていると考える。「最適化の質問」とは、質問が「最良の場合」や「問題なし」の結果に対する傾きを持つような前提や優先性を組み込むようにデザインされることである。通常、質問の優先性に対して非同意としてその応答をすることは、社会的には回避される行為であることから、逆のことがいえる証拠がない限り医師は問診において、常に最適もしくは「問題ない」の方向に質問を組み立てる傾向がある(Ibid.:206-207)。この場合、1日3食食べることは、妊婦が健康的な生活を行う上で望ましい行為であるという前提を有する。例えば、「1日何回食事をとっているのか」と質問した場合、1日3回の食事をとっていないということが前提とされることになる。それは、妊婦の食生活としては最良の場合ではないことを前提としてしまうため、妊婦に対して「最良の場合」を考慮していない態度を表すことになる。そのため、「最適化の原則」を利用して、望ましい形式で質問を行うようにデザインされたといえる。

### 3.2. 情報を補うために行われる質問

1日の中でどの食事をとっているのかについて朝・昼・晩と順番に応答がなされた後、助産師は22行目において「内容はどうか?」と質問を行う。これは、ももとの1行目の助産師の質問における②の質問内容になり、①の質問内容に対する回答が得られたあとの位置においてなされている。通訳者は23行目で「E o que é que come bem? (何をよく食べる?)」と疑問詞が用いられた質問形式で訳出を行っている。1秒の沈黙の後、妊婦の母親が「Na janta? (夕食で?)」とどの食事の内容についてなのかを確認する質問を行う。これは、22行目の助産師の質問の前に、母親は18行目で夕食は食べるかと応答していることから、これに関連して夕食についての質問であるかを確認する修復開始となっている。これに対して通訳者は27行目で「É, ao café da manhã, o que é que ser. (そう、朝食ではどんなものを)」と述べている。通訳者はまず、「そう」と母親の認識に対して肯定を表し、さらに「朝食ではどんなものを」と述べることで、夕食だけでなく、朝食も何を食べているかをきく質問であるという修復を行っている。これはももとの助産師の質問(1行目)において、助産師の質問内容が①1日のうち3食どれをたべているかと②量や内容など、どのような食事を行っているかが含まれている質問がなされたことを通訳者が理解をしておき、その質問内容にそった形で応答がなされるように回答を引き出しているといえる。

そして、母親は28行目において「É fome, ela toma leite, come um pão, bolachina. (お腹がすいたら、彼女は牛乳を飲んでパン、ビスケットを食べる)」と述べ、期待される形式の応答を行っている。そして、通訳者は31行目で「Pão de forma? (食パン)」と質問をする(詳細質問)。これは、28行目の母親がパンを食べていると述べていたのに対して、どのようなパンであるかを特定する質問を行っている。また、通訳者は続けて35行目でどのようなビスケットを食べているかの質問も行っている(詳細質問)。これらの2つの質問は母親の応答は期待される形式でなされたが、その応答の内容では、助産師が必要とする情報としては不十分であることから情報を補うための質問がなされたと考える。

では、通訳者はなぜこのような質問を行ったのであろうか。この場のコミュニケーションの課題は、妊婦の体重が増加し

すぎないように食事制限の必要性を妊婦が理解して適切な食事ができるように指導を行っていくことである。この場面において、1日で3食どれを食べているか、またその食事の量や内容などはどのようなものかの情報が助産師に提供されないと、助産師が適切な食事制限の指導を行っていくことはできない。そのため、助産師が専門的判断、指導を行うために必要な情報の補完をしているといえる。例えば、食パンは一般的にそれだけを食べることはなく、バターやジャムを塗ったり、チーズやハムをのせて様々なアレンジをしたりして食することができるので、どのように食べるかによってカロリーの摂取が増加してしまう食べ物であるといえる。そのため、パンの種類の特定制がこの場面において必要だと認識され、このような質問がなされたのだと考える。また、ビスケットにおいてもどのようなビスケットなのかを特定することで、妊婦が実際にどれくらいのカロリーを摂取しているかについて、助産師に専門的判断、指導を行うために必要な情報の補完をしている。しかし、このような通訳者による質問はどのような情報が助産師において専門的判断・指導を行うために必要な情報であるかを適切に知っておく必要がある。また、専門的判断や指導を行うのはあくまでも助産師であり、通訳者が助産師の権限を侵害しない範囲で介入をコントロールしないと行けない。この場面においては、助産師の権限侵害は行われておらず、情報提供にとどめていることが、この質問行為がこの場での適切性を与えているといえる。

#### 4. おわりに

本稿で明らかになった点は以下の4点である。まず、通訳者は助産師から複数の意味が含まれている質問がなされたときに、一度に複数の意味内容を含める訳出で質問を再現するのではなく、連鎖を複数に分けることによって、助産師の意図する質問内容を聞き出していくようにデザインをしていることがわかった。そして、その質問のデザインにおいても、医療場面での質問の基本的原則の一つである「最適化の原則」を用いて質問を組み立てていることが明らかになった。食事制限を指導する場面において、妊婦自身が食事制限の必要性を認識し、自らの意思で食事制限を行うことができるように支援、指導していくことがこの場の最終的目標となる。そのような場面において、妊婦に対して最大限の配慮を用いて質問形式（極性質問）をデザインしていくことは、その場において通訳者が解決すべきタスクであったといえる。さらに、極性質問において、期待される形式ではない応答がなされた時に、通訳者自らが利用できる位置において、質問を行い、期待される形式に合わせた応答を引き出していくことがなされていた。このような通訳者の対応は、その場のやりとりを一貫性のある理解可能なやり取りとして成立させていくことになり、引いては会話の参与者（妊婦や母親）が社会成員として適切な応対が行えるように会話を組み立てていっているといえる。このことは、異文化を背景にもつ人々同士の関係性を強める作用となると考える。

また、期待される形式の応答がなされているが、その内容を助産師が専門的指導や判断を行うのに不十分であると認識した場合は、自らが利用できる位置において質問を行い、その不十分な情報を補完していることが観察された。しかし、この行為については、通訳者の経験年数やどのような形態で通訳を行っているかによって、行為の正当性が異なるものだろう。調査対象の通訳者は、同じクリニックで長年働き、助産師の専門的活動内容及び必要とする情報内容についても相当な知識を有しているため、このような行為が長年の経験から行うことができるようになったといえる。例えば、派遣形態で毎回通訳を行う場面や通訳対象となる専門家（医療者）が異なる場合には、このような行為は難しいかもしれない。また、同じクリニックで長年働き、専門的活動・情報内容を知っているが、通訳者の専門的技術として適切な介入行為を行えない通訳者もいるだろう。だからこそ、通訳者の自発的発言がどのようになされているかを明らかにすることによって、適切な介入行為がどのようなものであるかを考えていくことができるのではないかと考える。

#### 参考文献

- 飯田奈美子(2018)「対話通訳における逸脱行為の考察—新生児訪問模擬通訳の会話分析から—」『通訳翻訳研究』No.17,1-22.
- 飯田奈美子(2019)「対話通訳における通訳者のトラブル修復についての考察—新生児訪問模擬通訳の会話分析から—」『通訳翻訳研究』No.18号,pp43-63.
- 串田秀也・平本毅・林誠(2017).『会話分析入門』
- Boyd,E.and Heritage,J.(2006)Taking the history: questioning during comprehensive history-taking. *Communication in Medical Care Interaction between Primary Care Physicians and Patients*. Ed.Heritage,J. Maynard,D.W.Cambridge University Press.=2015 川島理恵,樫田美雄,岡田光弘,黒嶋智美『診療場面のコミュニケーション—会話分析からわかること』勁草書房